

森鷗外「青年」論

——「ラシイヌ」を視座にして——

高野 奈保

〔キーワード〕 ①森鷗外 ②青年 ③ラシイヌ ④エウリピデス ⑤フランス文学受容

—

森鷗外「青年」(「スバル」明43・3(44・8))には、多くの文学的記号が散りばめられている。その文学的記号は場所や時代、ジャンルを問わず、時に地の文を侵食するほど存在し、イプセンの「Brand」(七)や「John Gabriel Borkmann」(九)のように、純一や附石ら登場人物によって語られることで、小説の展開について決定的な影響を及ぼしたり、ルモニエの「Aude」(十五)のように比喩として出されたりしている。

清水孝純は「引用のドラマとしての『青年』」(『鷗外の作品』(講座森鷗外第二巻)新曜社、平9・5)において、「青年」におけるこの特徴を「引用のパッチワーク」と名づけた。引用を「純一」という青年のポリフォニックな自意識の「裡にとりこまれた、あるいはとりこまれるべきテキストという〈声〉」としてとらえ、「青年」の「一種独自の架空性」を指摘したので

ある。純一とは「さまざまな声を内にとりいれ」「それらの声とつきあいつつ、真の創作意識を求めて遍歴する意識」を言うのであり、純一が小説の最後で「真の醒覚に到達」したことで「彼の自意識の裡になりひびいていたさまざまな〈声〉」は「終熄」し、「ポリフォニックな〈声〉」は「ある方向に向けられた、力強いユニゾン」となったと述べている。

しかし、小説中では純一が手に取りながら「内にとりいれること」のなかった「〈声〉」も存在する。純一が坂井夫人から借りた二冊の「ラシイヌ」全集である。「ラシイヌ」は坂井夫人与純一を繋ぐ「一筋の糸」(十一)であり、二度の根岸への訪問を経て「質」(十五)となった小説中で重要な小道具であるにもかかわらず、純一はそれを読もうとせず、語り手も決して中身を解説しようとはしない。「ラシイヌ」は「引用のパッチワーク」である世界に登場しながら、引用を取り入れる純一という「意識」に影響を及ぼさなかったという意味で、先にあげ

たイブセンとは対照的な位置にある。小説内においては稀有なテキストだといえよう。

疑問なのは、なぜ純一の手に渡ったのがラシーヌだったのかということ、そしてテキスト内に登場しながら聞かれることになかった「へ声」の意味とは何かということである。

この問題を考えるため、まず次節で「青年」連載時におけるラシーヌ受容を明らかにし、「ラシーヌ」という記号がどの程度同時代の読み手に通用するものであったかを確認したい。

二

十章において、純一は坂井邸の書齋で「立派に製本した」『Cornelle et Racine et Molière』の全集や『Voltaire et Hugo』の著書を見て、「大抵已のあるだらうと予期してゐた本」だと感想を述べている。また、「閨歴」の翌日、純一は朝食後に「ラシーヌ」を「一二枚開けて見るが、「読む気になれ」ない自分に対し、「こんなクラシックなもの、気分のもつと平穩な時に読むべきものだ」(十二)と言いつくす。「クラシック」という表現は九章で「シエクスピア」や「ギョオテ」に代表される、「一時流行でなくて、千古不易の方に属する作」に与えられていたものである。語り手はそれらの作が「今の青年に痛切な感じを与えることはむづかし」いばかりか、「百年前の落ち着いた深い趣味」を「味ふ余裕は、青年の多数には無い」としていた。

ラシーヌは確かにコルネイユやモリエールとともにフランス

古典主義作家の「三大家」(長田忠一(秋濤)『仏蘭西名作梗概』東京専門学校出版部、出版年不明)の一人である。上田敏は「仏蘭西文学の研究(三十年八月)」(初出「帝国文学」明30・8、『文芸論集』所収、明34・12)で彼やコルネイユの「英訳を繙く者」の人数を「ゲエテ、シルレル、ハイ子等の英訳を暗ずる者」と比べており、その作家的地位の高さも「青年」本文に書かれているとおりだと言える。

しかし、一般的な知名度という点で考えてみれば、ラシーヌは「青年」で挙げられた他の作家に比して、かなり低いほうに分類されていたと考えられる。というのは、敏はラシーヌらフランス古典主義作家の読者は、ゲーテやシラーの読者より「頗る少数なれば、仏の原文に遡りて、十七世紀の典雅莊重たる劇詩を愛読する好機を失ふもの甚だ多」く、仏文学全体の受容状況についても「時として仏文小説の英訳を愛読」する者も、「粗鹵杜撰なる翻訳に拠りてユウゴオ、ゾラの扭歪を瞥見するのみ」と続けているからだ。そしてラシーヌの翻訳は、管見の限りでは長田秋濤の『仏蘭西名作梗概』に収められた「ブリタニキウス(Britannicus)」の梗概だけなのである。

これを考えれば、明治期におけるシエクスピアやゲーテ、ユーゴーやモリエールらと、ラシーヌが知名度の点で比較にならないことは明らかである。コルネイユも翻訳はほとんど見られないが、国立国会図書館編『明治・大正・昭和／訳訳文学目録』(昭34・9)によれば、「脚本 哀々記」(飯田旗軒訳、「読売新聞」明32・9・21〜10・15)が存在する。

先に挙げた『仏蘭西名作梗概』は、序ではコルネイユ、ラシ
ーヌ、モリエールという順番で紹介すると書かれているが、中
途で「執筆者の都合によりて一先づ茲に此講述の結」んだため
ラシーヌの戯曲は一本だけ、モリエールに至っては全く書かれ
ていない。それでも事実として、コルネイユは「シード
(Cid)」「オラース (Horace)」「シンナ (Cinna)」「ポリュク
ト (Polyucte)」の四作品の梗概が紹介されている。ヴォル
テールも明治二十六年三月に『瑞典国王查斯十二世伝』(阿部
漸訳) が出版されていた(国立国会図書館所蔵)。ラシーヌの
邦訳は、時田清による『世界戯曲全集31巻 仏蘭西篇1』(近
代社、昭2)の「ブリタニキユス」と「フェードル」まで待た
ねばならなかった。

敏は、仏文学の翻訳が英・独文学に比して少ない理由につい
て「十七世紀の仏蘭西文人は、文芸復興の後を承けて、古典の
研究に意を潜め、希臘詩文の模倣を勉めて、典雅ならむとし、
莊麗ならむとし、礼節を重じたる余弊にや、理に偏し情を矯め
たる傾向見えて、情熱の熾盛を尚び、思想の自由を崇むる今世
紀の心を以て之に対すれば、慊然たるべし。」と説明している。
つまり、「十七世紀の仏蘭西文人」の著作は、文体の美しさを
重視したために、思想を重視する「今世紀」の読者には顧みら
れないと言っているのである。

敏の見解は明治三十年代のものだが、少なくとも「十七世紀
の仏蘭西文人」についての評価については明治四十年代に入っ
てほとんど変わらなかったと思われる。^{注2} 生田長江は「クラシ

ック文学の研究 仏蘭西文学」(『外国文学研究法』新潮社、明
41・10)で「十七世紀の仏蘭西文学は一引用者」少くともラ
シーヌの『ナタリイ』、コル子エユの『シッド』、モリエールの喜
劇、ラ・フォンテエヌの譬喩談位は一通り読むで置かなければ
ならないと思ふ。」として、次のように続ける。

たゞ無暗と、煩悶だとか懷疑だとか云ふやうな喧噪なる題
目をのみ要求せず、一面には典雅沈静の趣をも解するだけ
の余裕がある人ならば、また、写実の外に芸術の天地ある
ことを承認するだけの宏量なる人ならば、ラシーヌが『ア
タリイ』第二幕第五齣、夢の場の如き整齊明暢の文辞、苦
まずして人心の機微を穿ち、多色多彩、亮々たる糸竹の声、
鏘々たる金玉の音に対し、陶然として酔はされずには居ない
であらう。

長江のこの文章は、おそらく先に引用した敏の「仏蘭西文学
の研究(三十年八月)」に基づいたものである(両引用文に付
した傍線の種類はそれぞれに対応している)。

美術に喧噪あるを聞きて、沈静あるを知らず、写実あるを
察して想化あるを弁せざる徒は、素よりラシーヌ、コル子
エユ等の妙趣に眼ある能はずと雖、成心なき摯実の研究者
は清冽なる此等典雅の文字に對て、尊崇の意あるを禁ぜざ
るなり。例へばラシーヌの傑著『アタリイ』(一六九)一

第三幕第五齣、夢の場の如き、整齊明暢の文辞、苦まずして心理の機微を伝へ、多趣異彩亮々たる糸竹の声、鏘々たる金玉の音あり、悪夢を描写して精緻を尽せる而已か、同時にまた女王アタリイの性格を顕はして余温無き、天下の至文ならずや。

ラシーヌに関する評論の少なさを考えれば、長江の行爲も無理のないことであつたろう。実際「青年」連載前後に発行された新聞雑誌において、ラシーヌに関する記事を管見の限りでは見つけることができなかった。調査対象は、「東京朝日新聞」「東京日日新聞」「国民新聞」「時事新報」「読売新聞」の全ての面、雑誌は「趣味」「白樺」「新潮」「新思潮」「新小説」「スバル」「青鞥」「太陽」「中央公論」「文章世界」「ホトトギス」「三田文学」「明星」「早稲田文学」の、明治四十二年から四十四年にかけての記事である。このことも、ラシーヌへの評価がほとんど変化しなかったことを示すだろう。むしろ、自然主義を通じた日本の文壇においては、「文辞」(敏)を評価されていたラシーヌは、ますます注目されにくくなっていたはずだ。

したがって、「青年」連載時の読者がラシーヌを知る機会があつたとしても、例えば「モリエールの喜劇作家として名声を恣にする如く、ラシーヌは悲劇作家として之に劣らざる声誉あり其傑作/Athalie/Phigene/はヴォルテールも人間の得て企て得べき丈け完全に達せりと評せり」(喜内芳樹『欧米文学研究之手引』新橋堂、明37・2)という程度に(名前)は知って

いる」という作家であり、純一がラシーヌを読まずにいたとしても、それは読者に疑問を抱かせるものとはならなかつたと考えられる。実際そのような同時代評は見つからなかつた。^{注3}

更に問題なのは、「青年」を執筆した鷗外がラシーヌを読んでいたかどうかすら判然としないことである。東京大学総合図書館に保存されている鷗外の蔵書(以下鷗外文庫)に、ラシーヌの著作は独語訳のものが五冊^{注4}ある。ただしこの五冊には鷗外による書き込みは確認できなかった。また、「青年」十五章で書名が出されている「フェードル」Feodoreは鷗外文庫に所蔵されていない。

「フェードル」には鷗外が愛読していたシラーによる翻訳があり(題名は「フェードラ」Phadra)、鷗外文庫にも納められている。^{注5}その本には鷗外による署名と書き込みがあるが、書き込み箇所は「フェードラ」ではない。したがって、鷗外が読んだ可能性は高いが、読んだと断言することはできない。

つまり、ラシーヌは送り手にとっても受け手にとっても、テキスト外で文学的な意味を喚起させることがほとんどできないような記号だったのである。

大石直記は、「文学的感染」論・序説/一九一〇年前後―抑圧される(身体(自然)/ヘメディア(表象)の専制力―(『日本文学』平16・8)で、一九一〇年代の日本の都市部において「大量に生産され、流通される文学が生み出す、夥しい表象群に感染する人々」を「文学的感染者」と名づけ、その「文学と読者の間に生ずる」「根源的な問題的關係性」について

意識的であつた作家としてまず鷗外を挙げた。

大石は純一と坂井夫人の關係を「媒介」したのが「フェードル」(破滅へと至る熱情的恋愛戯曲) という「文学書」であることを指摘し、鷗外による「文学的感染者」の典型といふべき「煤煙」への意図的なメタ・クリティックであるとして「看取」しているが、ラシーヌが明治後期において通用しない文学的記号であり、かつ二冊の「ラシーヌ」を純一が参照しなかつたことを考えれば、純一と坂井夫人の關係は「煤煙」における要吉と朋子の關係とは異なるものと言えるはずである。その点で、「文学と現実の錯視と転倒」という同時代の文学的状况」に対する鷗外の「メタ・クリティック」は、大石の指摘より周到なものだつたといえるだろう。

純一が、二度訪れた坂井邸で二度ともラシーヌを選択し、かつ読まずに返したという行為は、「文学的感染者」にとつては、「文学と現実の錯視と転倒」という同時代の文学的状况」に「巻き込まれていく」身振り自体が重要なのであつて、したがつて「文学書」の内容は参照される必要がないこと、また参照してないことが意識されないほど、文学者の間で「文学的感染」という現象が自明のものとなつていたことを示しているのではないだろうか。

しかし、参照はされなくても、「ラシーヌ」はテキスト内で重要な小道具として機能している。次節では、「ラシーヌ」のテキスト内での役割を確認し、「ラシーヌ」が登場した意味を考えてゆくことにしよう。

三

明治四十二年「十一月二十七日に」「イブセンの John Gabriel Borkmann」を観劇しに訪れた有楽座で、純一は「謎の目」の持ち主坂井夫人と出会い、夫人の自宅にある「フランス語」の「書物」を見に来るよう誘われる(九)。根岸の夫人宅へ赴いた純一は、その夜夫人と「閲歴」を為し、「ラシーヌ」を持ち帰る(十)。

「閲歴」の翌日、純一は「ラシーヌ」を「一二枚開けて見るが、「クラツシツク」な本を「読む気になれ」ず、代わりに「Hysmans」を手取る(十一)。「あの靈を離れた交」を坂井夫人が「いつまで継続しようとする」かが気になる純一にとつて、「借りて帰つてゐるラシーヌの一卷」は「今は自分を向うに結び付けてゐる一筋の糸」である。この時点での「ラシーヌ」は、坂井夫人との關係性の象徴であると同時に、「放縱」な「空想」、つまり性欲を増幅させる装置でもある。

根岸に二度目の訪問をする夜には、「ラシーヌ」は「或る希求」、すなわち性欲解放の象徴として、純一にはっきり認識されるようになっていた(十五)。「ラシーヌ」は、純一にとつて「あの坂井夫人の所へ行くことの出来る possible を己に与へるといふ」一点において「外の本と」區別されるものであつた。この「possible」は「或る希求に伴ふ不安の念」を解消する「possible」に他ならない。しかし純一は根岸には直行せず、「ラシーヌ」を持ったまま「上野の山をあちこち歩き廻る」。

何と思ふともなしに引き返して、弁天へ降りる石段の上まで来て、又立ち留まつた。ベンチの明いてゐるのが一つあるので、それに腰を掛けて、ラシイヌを翻して見たが、もう大ぶ昏くて読めない。無意味に引つ繰り返して、題号なんぞの大きい活字を拾つて、Pedre なんといいふ題号を見て、ぼんやり考へ込んでゐた。(十五)

純一はここで「ラシイヌ」を読もうとする。しかし「不安の念」に駆られる純一には、やはり「ラシイヌ」本文を「味ふ余裕」(九)はなく、辛うじて一冊目の「ラシイヌ」の「題号」が「Pedre」であることだけを確認し、直後に坂井夫人の住む根岸に向かうことを決心するのである。

到着した坂井邸で、純一は「良心の軽い呵責を受けながら、とう／＼読んで見ずにしまつたラシイヌの一卷を返す。だが坂井夫人は「見遣りもせず手にも取らずに、「お帰りの時、どれでも外のお持ちなさいまし」と云うだけだ。「ラシイヌ」は、持ち主である夫人にとっては単なるモノなのである。そして、純一にとつても借りる本はもはや書物として意識されなくなりつつあった。「選びもせずに」他の作家ではない「ラシイヌの外の一卷を抜き出す」すのは、その証拠である。純一は「読む気になれない」本をわざわざ選び、「己を悩ました質の、ラシイヌの一卷は依然として己の手の中に残つたのである。そして又己を悩まさなくては済まないだらう。」(十五)と考える。

このときから、「ラシイヌ」は文学テクストではなく「質」として純一に意識されるようになる。だがこれは誰にとつての何の質草なのだろうか。「ラシイヌ」は夫人から純一に渡つたものであるが、夫人は純一に負うところは何も無い。むしろ「質」を持つている純一が「悩まさなくては済まない」と負担に思うものである。

それを考えるのに役立つのが、純一の「心の中に往來してゐた」「aventure」(十)の図式である。

或る aventure に遭遇して見たい。その相手が女なら好い。そしてその遭遇に身を委ねてしまふか否かは疑問である。

その刹那に於ける思慮の選択か、または意志の判断に待つのである。自分の体は愛惜すべきものである。容易に身を委ねてしまひたくはない。事に依つたら、女に遇つて、女が己に許すのに、己は従はないで、そして女をななるべく侮辱せずに、なだめて慰藉して別れたら、面白からう。(十)

純一は、「自分の体」への「愛惜」から、女性が「許す」にあえて「従はない」「aventure」を「面白く思つていた。

この図式は、女性の身体と性的関係に関する決定権を完全に掌中に収めたいという純一自身の欲望する性的な権力関係が示されたものと言える。これを純一と坂井夫人の関係に当てはめると、「ラシイヌ」は女性たる坂井夫人からの「aventure」の「許」しそのものであり、したがって「質」は坂井夫人から渡

される彼女という「美しい肉の塊」(二十四)である。二冊目の「ラシイヌ」は、性欲を喚起する装置としての機能をより強めたものとして、「質」と表現されたのである。

もつとも、純一はその「aventure」の図式を否定しにかかると。彼の内部では、「真の生活」や「猛烈な恋愛」を「求めよう」としない。自分を恥じる「己の醒めた意識」と、彼の嗜好が「養成」した「vanité」と「宦官のするやうな態度」の「媚」は常に対立している。純一は坂井夫人との「閨歴」は「かう云ふ皇に生えた苗に過ぎない」と日記で分析し、「真の生活」を模索しようとするのである。

この「夜の思想」は「昼の思想」でも変わらなかったようだ。純一は、「目的に向つて一直線に進んで来」た坂井夫人に対して「自分は受身」だと考え、夫人を「待たれるやうな氣」がして「空想の次第に放縱になつて来るのに心附」き、「自分を腑甲斐なく」思う(十一)。

自分は男子ではないか。経験のないために、これまでは受身になつてゐたにしても、何もいつまでも受身になつてゐる筈がない。(略)もう向うの自由になつてゐないと、こつちが決心さへすればそれまでである。借りた本は小包にしてでも返される。(十一)

この純一の内的独白において、坂井夫人に対して「受身」でなくなることで、自分が「男子」であることは対応している。

「受身」でない「男子」としての態度として、「借りた本」すなわち「ラシイヌ」を返すことが挙げられている。

この決心は大村との会話によって強められる。十二章で大村が紹介するワインゲルの言説によって、恋愛の不可能性と「貞操」の男性ジェンダー化が暗示されるからだ。また、十一章での会話で「男子の貞操」は「利他的」意義によって「積極的新人」の思想と結びつけられ、「神経質の遺伝」(十五)との関連も指摘される。「貞操」の保持は、純一が「男子」であり「積極的新人」であり、かつ「健康体」であることの証明となりうるものとして位置づけられるのである。

だから十五章の二度目の訪問は純一にとって「恥辱」の「事実」となったのだ。お雪さんの来訪によって「自制力の一角が破壊」された結果、この訪問を「自分が主動者になつて」現かせてしまつた」上に、「会見」の「主動」を握ることができず、「打勝たれた人の腑甲斐ない感じ」を胸に帰宅することになった。「ラシイヌの外の一巻」は、その証拠である。

つまり、「ラシイヌ」は坂井夫人によって渡された「質」というだけでなく、「自分が主動者になつて」(十五)「男子の貞操」を保ち、「積極的新人の面目」(十一)を立てるために純一が純一自身に負わせた「負債」(十八)でもあった。

「ラシイヌ」は、「質」としてみなされてから以降、最終章(二十四)までテクストに登場しない。二十二章で箱根行の決心をした際は、「不安の塊り」の「急劇な増長」による「反理性的意志の叫声」に「策うたれて起つたに相違ない」と語り

手に説明されているだけで、「ラシイヌ」に対する言及はない。そして再登場する二十四章では以下のように書かれている。

四

箱根を去るのが実に名案である。(略)そしてこれを機会にして、根岸との交通を断つてしまふ。あの質のやうになつてゐるラシイヌの集を小包で送り返して遣る。早く谷中に帰つて、あれを郵便に出してしまひたい。さうしたらさぞさつぱりするだらう。

この「ゆふべの決心」が翌朝「明かな目で見れば見る程、大胆で、heroiqueな処が現れて来るかとさへ思はれる」ようになるのは、「ラシイヌ」が返すのが困難な「質」であつたことを考えれば当然であつた。

「ラシイヌ」は純一にとつて坂井夫人という性欲そのものの象徴(＝坂井夫人による「質」)であり、彼が「男子」として「積極的新人の面目」を果たし、作家として歩むための「負債」であつたといえよう。したがつて「質」は坂井夫人との「交通」を断つための物的証拠として存在すれば十分なものであつた。「質」が本であつたのは、「文学的感染者」(大石直記)である純一が手に取りやすいものであつたということ、坂井夫人との関係が、純一に「下宿屋の二階」(十)に類する経験を積ませる(テキスト)だつたからだろう。「質」に選ばれた本が、ほとんど記号内容の伝わらない作家であるラシイヌの著作であつたのは、純一に否認され続けるためであつたのだ。

しかしながら、その「質」が明治時代に知名度の低さでは似たようなものであつたコルネイユではなくラシイヌであつたと、「質」として意識する前に持つていた「ラシイヌ」がエウリピデスによるギリシャ悲劇「ヒッポリュトス」を基にした「フェードル」Præteであつたことは、「青年」の展開とまるで関連性がないとも言ひ切れないように思われる。何より鷗外は「フェードル」の元のテキストであるエウリピデス「ヒッポリュトス」の独語訳を、傍線を引きながら読んでいた。^{注10}

ここで「ヒッポリュトス」の内容を確認しておこう。「ヒッポリュトス」は処女神アルテミスに寵愛される青年ヒッポリュトスが、愛欲の女神キュプリス(アプロディテ)を敬わなかつたため女神の怒りを買ひ、落命するさまを描いた戯曲である。

ヒッポリュトスは全くの女嫌いで、自らの貞操の高さを誇り、女性を「禍い」(六二―六行)と言ひ放つ高慢な青年として書かれている。ヒッポリュトスが落命する原因は、キュプリスの呪いによつて彼を愛してしまつた継母のバイドラーの求愛を彼が手酷く拒否したことから始まる。

絶望したバイドラーは自分がヒッポリュトスに犯されたと思つた板を手を縊死してしまふ。バイドラーの書板を読んで激怒した父王テーセウスはヒッポリュトスを追放し、かつ父神ポセイドンにヒッポリュトスを誅するよう祈願する。ヒッポリュトスはポセイドンによつて遣わされた牡牛によつて致命傷を負う。

しかしヒッポリュトスの潔白は彼の死に際に登場するアルテミスによって語られ、父子が和解しヒッポリュトスが息を引き取る場面で戯曲は終わるのである。

ヒッポリュトスは、性愛や女性を軽蔑する一方で父のテーセウスに強い恭順を示している。そして、鷗外が「ヒッポリュトス」について注目した箇所こそ、その点であった。^{注11}

ラシーヌ「フェードル」の物語内容は「ヒッポリュトス」とほぼ同様である。異なるのは、イポリット（ヒッポリュトス）が「情を知ら」ず、「女を蔑」み「寄せつけ」（第二幕第一場）ない「雄々しい美德」（第二章第一場）の持ち主である一方でアリシーという父の敵の一族の娘を恋する青年であることと、フェードル（パイドラー）本人がイポリットに愛を告白したこと（「ヒッポリュトス」ではパイドラーの恋心を乳母がヒッポリュトスに話してしまふ）、テゼー（テーセウス）への讒言がフェードルではなく乳母によってなされたこと、イポリットの無実は罪の意識かられ毒をあおったフェードルの告白によって晴らされるという点である。

また、イポリットは継母の恋心を嘲笑して拒絶したヒッポリュトスと異なり、フェードルの《誘惑》に対して全くの受身である。「口もきけず」顔を「蒼白」にさせ、駆けつけた部下に「逃げるのだ」（第二幕第六場）と告げるだけである。

このような違いはあるが、両者に共通する（ヒッポリュトス受難譚^{注12}）とは、女性を排除し、自らの貞操の高さを誇る青年が、義理の母による「情欲」への《誘惑》と、同一化を欲望した父

による《処罰》（青年にとってみれば、自分ではなく継母のことを信じたという意味において、當日頃の父への恭順に対する《裏切り》とも言える）によって落命する物語だとまとめることができるだろう。

純一は「美少年」（十）である点、よく女性に好意を寄せられる一方で恋愛の不可能性を信じている点でヒッポリュトス（イポリット）と共通している。だが「相応に因襲や前極めを破壊してゐる」（八）純一は彼と異なつて確固たる「美德」を持たず、「積極的新人」の思想に接してなお「建設」する「何物か」を「永遠に希求」（八）している存在である。

純一は、初めて坂井夫人という《誘惑》に飛び込んだとき、「心の中で、「なに、未亡人だ」と叫ん」でいる。純一にとって「男子の貞操」はそのとき「利己主義」（十）的な意義しか持っていない。翌日大村によって「男子の貞操」の「利他的」（十一）側面を説明されるが、「自制力」はお雪さんの登場で簡単に「破壊」（十五）されてしまふ。

純一が根岸に再度赴く決心をしたとき、傍らにあった唯一の持ち物は「フェードル」であった。男性ジェンダー的な「美德」そのものの青年たるイポリットが、愛欲の女神に魅入られた女性フェードルの《誘惑》によって破壊するテクストを、純一は読まずに持ち歩き、自ら《誘惑》を求めに行く。

「フェードル」は、純一が（ヒッポリュトス）らがたどつた道を選択した場合の彼自身の行く末を暗示したものであったように思われるのである。

1

ヴォルテールは作家としてよりも歴史家、思想家として知られており、エー・ジー・グールドリツチ『仏国史(貝氏)』(文部省、明11・12)やゴールド・スミス(渋江保(羽化仙人)訳『支那哲学者歐洲巡遊通信』上巻(寸珍百種第二十八編、博文館、明26・4)、田川大吉郎『青年と時代の関係』(理代社、明35・8)で紹介されている。

2

モリエールだけは例外である。彼の著作の翻訳(翻案)は、富田仁『フランス小説移入考』(東京書籍、昭56・3)によれば「西洋風滑稽演劇／南北梅枝態(かげひなたうめのえだぶり)」「湖東生訳、「読売新聞」明19・10・31〜11・23)以来のべ四十五点に及び、明治四十一年三月には草野柴二訳『モリエール全集』(全三巻、金尾文淵堂)が発行されている。なお、明治における仏文学の移入については富田仁「早稲田文学」(第一次)とフランス文学」(比較文学」昭41・10)、富田仁、赤瀬雅子共著『明治のフランス文学—フランス学からの出発—』(駿河台出版社、昭62・5)も参考にした。

3

「ラシイヌ」を読まなかったことが当時の読者に意識されなかったことは、十一章で「ラシイヌ」の代わりに手に取ったのが「Huyssmans」だったことも影響しているだろう。ユイスマンスは「青年」連載当時の日本の文

壇においては島村龍太郎(抱月)が「新文芸の将来を祝福せよ」(『読売新聞』明43・1・2)で「新理想主義としてのシムボリズム」として評価した「霊的自然主義」

の作家としてみなされたほか、反自然主義陣営の文学者には「先生が自然派だからとて弟子も自然派で無くてはならぬと云ふ理窟は無い。遠慮は無用ゾラ対モーパッサン、ユイスマンス等(略)の故智に倣つて、自然派のおん大将連に向つて叛旗を翻してはどうだらうと唆し申す」(片山孤村「自然主義脱却論」『帝国文学』明43・4)というように、ポスト自然主義の代表格としても注目されていた作家である。このとき「ラシイヌ」が純一に「Huyssmans」と対比された上で否定されたのは、純一の「気分」(十一)のみならず、「青年」連載当時の文学的な利用価値を反映したものと思われる。

4

鷗外文庫に所蔵されているのは以下のとおり。

Jean Racine: *Andromache*, Trauerspiel in fünf Aufzügen, Uebersetzt von Theodor Wegener. Leipzig, Reclam. [nd.]

Jean Racine: *Athalie*, Trauerspiel in fünf Aufzügen, Übersetzt von Malwine Gräfin Maltzan. Leipzig, Reclam. [nd.]

Jean Racine: *Britannicus*, Trauerspiel in fünf Aufzügen, Deutsch von Karl Theodor Gaedertz. Leipzig, Reclam. [nd.]

Jean Racine: *Esther*, Trauerspiel in drei Aufzügen, Deutsch von Carl Theodor Gaedertz. Leipzig, Reclam. [n.d.]

Jean Racine: *Iphigénie in Aulis*, Tragödie in fünf Auszügen, Deutsch von Adolf Laun. Leipzig: Reclam. [n.d.]

5 Schiller sämtliche Werke in zwölf Bänden, Bd. 7
9. Leipzig, P. Reclam, [1...] 題名にはラシーヌ悲劇の
一「Ein Trauerspiel von Racine」とあり、ラシーヌ悲劇であることが示されている。

6 ワイニングは、『男女と天才』（片山正雄訳、大日本図書、明36・1）において、「女は性欲以外何もをも有せず、男は性欲以上なほ或る物を有す」ことから、「男子の貞操は、男子が自由なる意思と充分なる意識とを以て、自己に負わす束縛」であるのに対し、「女子に在りては、姦通は一種の機感的遊戯」であり、女子が「純潔」を保とうとした場合「女性たることを止めて男子と」なるしかないと述べている。

7 医学の専門書でなくても、「多数ノ有力ナル学者（クラフト・エビング、フォーレルなど―論者注）ハ、男女何レニアリテモ性欲ノ抑制ハ無害ナリト云フ説ニ左担スルヲ見ルガ、就中有力ナル学者ノ論証スル所ニヨレバ、彼ノ有害説者ノ称フル如ク病的症状ノ起ルハ、先天性又ハ後天性ニ神経、精神病的体質異常ノアル場合ニ於テ然ル

モノニシテ（略）其他ノ普通ノモノニアリテハ、時ニ抑制ノ困難ナルコトアルモ、然ル場合ニ於テハ（略）誤レル生活法ヲ整頓スレバ、何等ノ障碍ヲモ起スコトナク耐ヘウルモノナリ。」（駿河尚庸『性欲衛生法』佳趣堂、明43・7）のように、性欲のコントロールと心身の異常が関係づけられるとする言説は紹介されていた。

8 二度目の訪問では「閱歴」がなかったかもしれない可能性がある。この日記には「或る不可思議な告白」と断りを入れてること、「（此下日記の紙一枚引き裂きあり。）」の記述が語り手による注なのか日記に書かれているだけなのか判断できないこと、「引き裂き」の後も「無意味な、余所々々しい対話」が「又続けられ」ていること、「無意味」な「詞」を発しながら「閱歴」を望む純一を理解していた夫人の目は、引き裂き後「凱歌を奏するやうな笑」を浮かべ、一方で純一は変わらず夫人を「敵」視していること、洋室にしづえと「しよに」いたとき、「お雪さんとしよにゐるより、一層強い窘迫と興奮とを感じ」ていたことが、その根拠である。もちろん「閱歴」の有無にかかわらず、純一は強い敗北感に打ちのめされている。

9 エウリピデスはアイスキュロスとソフォクレスと並び称されるギリシャの悲劇作家で、「アイスキュロスは其嚴偉を以て、ソホクレスは完美を以て、而してユウリピデスは其精徹を以て称せら」（内村達三郎『悲劇王オイデポ

ス』日清堂書店、明40・12)れる存在として日本でも知られていた。「青年」連載時までに「ヒッポリュトス」の邦訳はされていなかったが、ただ、たとえ坪内逍遙が「希臘古代の演劇に就いて」(「能楽」明40・7)を発表するなど演劇関係者からの関心は高かったと考えられる。また文科大学哲学科のフォン・ケーベルの授業によってもエウリピデス受容があった可能性は高い。

10 Uebersetzt von Jacob Mahly: Euripides' *ausgewählte Dramen*. Leipzig: Bibliographischen Instituts. [n.d.]
表紙見返し右上部に「Mori」と署名があり、『ヒッポリュトス』の解説および戯曲本文に傍線が引かれている。

11 *Euripides' ausgewählte Dramen* の hippolyt 本文で付された傍線部は三箇所ある。一重線で引かれたのはパイドラの乳母の台詞(恋は一論者注) 大きな喜びと、姫様、けれどまた深い苦しみでうやいます」Die höchste Lust, mein Kind, doch auch der tiefte Schmerz. である。残りの二箇所は二重線で、どちからもヒッポリュトスの台詞である。一つが乳母との会話の最後にある長ぜりふのうち、「おおゼウスよ、なぜあなたは人間のために女のような偽りにみちた禍いを、この世に遣わしたのですか?」O Zeus, warum zum Schaden aller Mämerwelt Hast du der Weiber falsch Gezucht ans Licht gebracht? から「恋はする賢い女が抜け目なく育てるものだ、不器用な者はその性格が恋の迷いや墮落か

ら守ってくれる」Denn in die klugen pflanzt der Hang zur Liebe gern Die Hinterlist; die ungeschickten aber schützt Des Geistes Einfalt vor Verrungent vor Fall. まで。もう一つがテーセウスの台詞で「私はヘラ女神の武闘大会では第一位になりたいと思いますが、国の中では安心して第二位で甘んじたい」Ich möchte wohl in Hella's Kampffspielen stets Als erster glänzen unt als zweiter nur im Staat, かつ、発音である(邦訳は論者にゆゑ)。女性嫌悪と父への恭順とが強く意識されていることがわかる。

12 渡辺守章「訳注(フェードル)」『フェードル アンドロマック』岩波文庫(平5・2)

* 「青年」本文の引用は初出に、『フェードル』本文はラシーヌ作渡辺守章訳『フェードル アンドロマック』(岩波文庫、平5・2)に拠った。引用に際し、ルビヤ傍線等はすべて省略し、旧字は新字に改めた。引用文にあるルビヤ傍線等は、すべて引用者のものである。

* * 本論は二〇〇六年度学習院大学大学院「日本文学演習」(十川信介先生)において発表したものである。ご意見をくださった先生並びにゼミ生の皆様には心から謝意を呈した。

(たかの・なほ 博士後期課程)